

に翻刻。

○この年頃、不角著、浮世草子『華染分』成か。琴の夕（印は「不角」）自序。京三條の分限、両替屋善兵衛の一人息子花の介を主人公にした浮世草子。

・花の助、春雨といふ題にて、発句あんにて居ル時、きのふ五句付の一はん懐紙落申し候よし、一覽仕たく候と、小間物屋新七所よりのつかひ（略）せんども、表の中にしゆつくわひを云てわらはれ、此中も冬季を四句迄つゞけ、其しやうしさ、あれでも物に成ふかとおもふたに、上れば上ル物。

と、五句付や俳諧に興じる庶民が描かれている。

※同書は、半紙本零本二冊。一・二巻存。自家版。

板下も不角。『国書総目録』は元禄五年刊とするが、未詳。京都大学文学部蔵。『古典文庫 初期浮世草子Ⅰ』に翻刻・解説。

○この年頃、不角著、怪談集『怪談録前集』成か。自序。「望帝」・「金鳳釵」など三二項目の中国怪談を要約・邦訳、絵入りで紹介した怪談集。引用書目と

して『蜀王本記』・『大平廣記』・『説淵』・『剪燈新話』等二〇種を示す。序に「凡、薯蕷の鱷、蛤の雀、すべて変化のことはり、是天地自然成ものを、愚かにあやしめば、水にうつれる我影も我を吞り。心は万境にしたがつて転ず。徳の流行しては妖をのづからなく、一円相の中に指さすがごとし」とあり、世の怪異をやさしく紹介することを目的とする。書名から推測すれば、本朝物の怪談集を『後集』として続刊する予定があったらしいが、その伝本を知らない。

※同書は、半紙本五卷五冊。自家版。目録題は「漢考怪談」。刊年は不明だが、序の印記が、『千代見草』・『としく草』と二顆とも一致する点から、元禄五年頃と推定する。祐徳稲荷神社中川文庫他蔵。

（つづく）

「竹雨」号で初入集。竹雨の入集は同年五、七月に集中している（『若みどり』・『俳文学大辞典』）。

▽九月下旬、立吟編『餞別五百韻』刊。京に移住する立吟を送る不角の餞別吟を発句とする不角・立吟両吟百韻一卷収録。

・乗物に落馬はなしやをみなへし

不角

輯事にはわさ、悪酒ワル

立吟

百韻中には、他に、

・餞ハナムケの句をな忘れそ露時雨 角

そなた 不角よ 我名―立吟

など、打ち解けた応酬も見える。

※他の百韻四巻も、立吟と二世立志・子英・嵐雪・山夕との両吟。連歌師昌伴・調和・其角・沾徳・素堂・一品らの餞別吟を付載。牛見氏は、板下を不角と推定する（『俳文学大辞典』）。翻刻は早稲田大学図書館蔵本による。

▽一〇月二七日締切の前句題に、「寒い事かなく」が初めて出題される（『若みどり』）。

○一二月、不角編、前句付高点句集『若みどり』成。

自序。巻末に不角独吟百韻を収録。

※半紙本二巻二冊。自家版。三月、一二月締切分を収録。志田文庫他蔵。鈴木勝忠氏編『雑俳集成第二期』に翻刻。

▽この年、琴風編『瓜作』刊。発句三句収録。

※『枕草子』に倣って諸家の発句を配列した俳諧撰集。江戸蕉門以外の句も多い。

元禄五年（一六九二）壬申 三十一歳

○一二月、不角編、前句付高点句集『千代見草』成。

自序。巻末に不角独吟歌仙一卷を収録。

・我がちに虚ウツケ気を尽ツス中の町

西瓜買うぞ無ツ代ツまけてゆけ

追剝を家職に月を見て昏ス

連句は、前句付に劣らぬ浮世調である。

※同書は、半紙本二巻二冊。自家版。一月、一二月締切分を収録。志田文庫他蔵。『雑俳集成第二期』

元禄四年（一六九一）辛未 三十歳

○一月、不角著、浮世草子『好色染下地』刊。「松の月（不角）」自序。京の分限小間物問屋佐渡屋金兵衛の一人息子金四郎を主人公にした好色物語。吉原の遊女花紫との恋、越後屋の娘お松との困難に満ちた恋が、京・江戸・伊勢の地を巡遊しつつ描かれる。財産と器量に恵まれた主人公、芯からの悪人が一人も登場しない設定、そして、波瀾万丈も最後には大団円を迎えるという、楽天的で明るい趣を持つ。不角の散文的才能とともにその性情をよく示した作といえよう。

・どうめんつくつていふは、たれやらが俳諧はいかいをあんずる顔付かほにそのま、

※半紙本五卷五冊。自家版。版下も不角か。刊記「于時元禄四辛未天／正月日」。岩崎文庫蔵。堤精二氏解説『岩崎文庫貴重本叢刊 近世篇浮世草子Ⅱ』に複製。吉田氏前掲書に翻刻・解説。

▽春、路通編『俳諧勸進牒』成。発句一句入集。

・哥念仏申さぬ嵯峨の桜刈

不角

ただし、『蘆分船』に「一年、路通勸進帳といふ俳書に此句を入られしが、切レ字もなく文字も違侍る」と不満を漏らしている。

▽四月九日、師不卜没。「近曾サイッコロより聊心くるし」いで、前句付の批点を手伝いに来るよう命じられた不角は、内々の用事を捨て急ぎ師のもとに駆けつける。付句の点三巻の後、夕食の膳に向かうが、その半ばに容体が急変、治療の甲斐もなく、「我膝を枕にして眠れるがごとく師は急死し給ふ」という。江戸本所報恩寺に葬る（『一峠』・『師恩集』）。

▽一二日、秋田の某から不卜の辞世の句「あさがほの始めて散るも哀也」を受け取る。不卜の書通の弟子である某は、一日に不卜を夢に見、「江戸平松町に旧弟不角といふものあり。彼もの、まへとゞけてたべ」と依頼されたという（『一峠』・『師恩集』）。

▽五月二七日、五句付前句付興行。この日、巴人が

前句付は、煩わしい連句の座から作者を開放し、俳諧をより身近な文芸遊戯として大衆に提供したことに価値を見いだすことができる。浮世の場面と人情の断片を、自由気儘に瞬間的に切り取ってみせる前句付は、芭蕉のような人生への深い観照はないが、名もない庶民が描くモザイク模様の間人世界である。

▽四月一二日、五句付前句付興行。今回より、毎月一二日・二七日の二回を締切として興行。興行自体が軌道にのり、採算が取れる見通しがついたものと思われる（『二葉の松』）。

▽六月、嵐雪編『其袋』成。発句一句収録。

※この時期の江戸蕉門内の確執を反映し、杉風・曾良らの深川衆を疎外、蕉門外からも広く集句した俳諧撰集。

○一二月、不角編、前句付高点句集『二葉の松』成。不角前句付高点句集の第一集。江戸における類書の嚆矢となり、他の点者の出版・興行に多大な影響を及ぼした。

前句題毎に、両朱・両葉の高点句を紹介、最後に同日付の高点者二名を掲げる。自序に「句く新にして心よく、区に通達せり。惜かな、たゞにやみなんは、玉を深淵に抛の気味と、誹菌に実植よりの両朱・両葉の葉を筆に耕て、二葉の松の千代と諷ふ」とある。前句付という新文芸を鼓舞し、成長を願う心が記される。

※半紙本二卷二冊。零本一冊。上卷存。翌年、自家版で刊行か（『阿誰軒俳諧書籍目録』に「元禄五年三月」とあるが未詳。本年譜では作品成立年次を考慮し、便宜上、最終興行月に置く）。上卷に一八ヶ月締切分を収録。未発見の下巻分の作品は、元禄六年刊『難波土産』の抄録により、ほぼ復元することは可能。富山県立図書館志田文庫・平市立図書館他蔵。鈴木勝忠氏編『新日本古典文学大系 江戸座点取俳諧集』（岩波書店。平成5）に翻刻・注釈。

町、亀鶴。西丸。芝、調和。中橋、林中子。幸入。幽山。露言。(『江戸鹿子』)

・本庄三三問ほり、芭蕉。本町二丁目かし、幽山。石町四丁

め、才丸。山下丁、工呻。南小田原丁、蝶々子。日本ばし

二丁目、調和。いせ町、不卜。いせ丁、キ角。五郎兵衛丁、

山夕。石町七丁目、嵐雪。南伝馬町、露言。いせ町、

(一) 品。本町三丁目、立志。五郎兵衛町、沾徳。(『江

戸物鹿子』)

不角の目に映る、同時代の江戸俳壇の勢力図が興味深い。

※同書は、横本七冊。刊記は「元禄二己巳天中秋／大坂書林市兵衛板」。序の署名は、「于時元禄二己巳天八月日、松月堂不角序。住、平松町」。

▽この年、等躬編『葱摺』成。発句五句収録。三月三日興行の半歌仙を、須賀川の何云・廬桂・等躬・素蘭が継いで満尾した歌仙を収録。

・ 暮秋

千種枯て寝る事安し

モギドヲ
一哲に秋を惜まぬ野守哉

不角

は、乾巻の巻軸。
※等躬の第一俳諧撰集。須賀川滞在中の芭蕉の歌仙を収めることで有名。牛見正和氏(『ビブリア96』平成3年5月号)は、筆跡を検討し、『続の原』・『葱摺』の板下を不角と推定されている。

元禄三年(一六九〇) 庚午 二十九歳

▽一月二七日、五句付前句付興行始まる。三月まで、毎二七日を締切と定めて興行。

不角の前句付興行は、前句題として短句五句を出題し、不特定多数の投句者から付句を募るもの。江戸の前句付興行は、一品や調和も既に行っていたが、高点句を前句付高点句集として刊行したことが、不角の工夫であった(『二葉の松』)。

・ (かわゆがられて暮すなりけり)

長者の子しかも美人の明キ盲

求笑

殿様にお身といはれし我いもと

柳也

〔洗朱〕。

※調和点の前句付興行には、不角の他に、不卜・琴風・無倫・岩翁ら江戸の著名俳人も投句していた。

元禄元年（一六八八）戊辰 二十七歳

▽二月一〇日締切の調和点前句付興行に入選。第二席。
この年は、三月八日、四月二三日、五月二三日にも
入選（『洗朱』）。

▽三月、不卜編『続の原』成。素堂・調和・湖春・桃
青判の発句合に各一句、六吟（調和・不卜・拳白・
不角・溪石・勇招）歌仙、七吟（蚊山・不角・一
桃・以喉・扇雪・琴風・不卜）歌仙、四季発句一〇
句収録。

・松とりて常の旭と成にけり 不角
・我影に追付かぬるこてふ哉 不角

など、後年の類題句集に採られる不角の代表作を収
録。

※師不卜の俳諧句合・撰集。鈴木氏は「前句付派と

蕉風の間を縫って、両者間に交渉をもっていたのが
不卜であり（中略）本書は江戸俳壇の分裂後の集結
された撰集として特異性をもち、その面からも上方
に人気があったものらしく」（『近世俳諧史の基層』
平成4）と評価されている。

元禄二年（一六八九）己巳 二十八歳

▽三月三日、四吟（調和・心水・不角・無倫）半歌仙
興行（『葱摺』）。

▽三月二三日締切の調和点前句付興行に入選、第二席。
同年は、四月二三日にも入選（『洗朱』）。

○八月、不角増補、地誌『江戸惣鹿子』成。自序・自
跋。貞享四年、小林太郎兵衛刊『江戸鹿子』の増補
版。跋に「前の鹿子の文字の違ひを改め、ことたら
ぬをます」とある。巻頭に大名屋敷住所録を増補し、
一部記事を書き換える。異同の一例として、以下に
「俳諧師」の項目を挙げる。

・雪柴。桃青。瀬戸物町、一品。舟町、不卜。堀江

つ物の二組目に付句。

・ 元日

しら梅にかくす名もなしふる男

拳白

春風見せよよね市がきぬ

不卜

弥生行上戸のために関すへて

不角

・ 我つまの媚うとからぬかも

夜ヨの始李白とよばゞとく答よ

不角

※不卜一門の歳旦帳。書名は、洒竹文庫蔵本の後補

墨書打付書による。

貞享四年（一六八七）丁卯 二十六歳

○八月下旬、不角著、浮世草子『色の染衣』刊。不角

浮世草子の第一作。近江国三井寺のほり金沢山楽

寿院福蔵寺の僧の思い人となった、若衆嶋沢数馬を

主人公にした物語。男色、傾城小桜との純愛、殺人、

敵を求めての江戸下向、処刑による死など多彩な題

材を盛り込んだ作品。平易な文章を畳み掛けていく

表現に、散文の才をいかんなく發揮している。

・ 夕ぐれはくたびれて居る胡蝶こてふかな

と発句ほつくして、さびしきまどをた、く青柳、泉水せんすいの

面おもてを游あそぶもよし。

たまり江の三ヶ月濁にごす柳哉

をと、ひの哥仙かせんてん点いかゞ心もとなし。むつかしき

花、よほどでかしたと思ふが、点てんはしれぬもの。

と、点取俳諧に心を砕く様など、随所に俳諧の記事を散りばめている。

※同書は、半紙本四卷四冊。版下、不角か。初版本は大東急記念文庫蔵。刊記「貞享四丁卯歳仲秋下旬

／作者松月堂不角／大和絵師庄兵衛図／日本橋南二町目式部小路／近江屋重兵衛板行」。庄兵衛は、浮

世絵師初代鳥居清信。後刷本は京都大学文学部図書館他蔵。刊記は「丁卯歳仲秋下旬／作者松月堂不

角」以外を残し削除。自家版として再版したものか。吉田幸一氏編『古典文庫 初期浮世草子I』に翻

刻・解説。

▽八月二四日締切の調和点前句付興行に入選。第一席

卷の四季発句の部には入集せず。

天和三年（一六八三）癸亥 二十二歳

▽五月、調和編『誹諧題林一句』刊。発句一句収録。

・ 櫻

櫻頸青蠅棘に止ッてけり

不角

右は、現在入集を確認できる最初の発句。

※調和は、岸本氏。延宝頃は江戸俳壇で最大勢力を

誇った俳諧師。同書は『富士石』『金剛砂』に次ぐ、

調和の俳諧撰集の第三集。前集に比較し、撰集の規

模は縮小傾向にあり、句も難解奇矯な作風が目立ち

始めている。

貞享二年（一六八五）乙丑 二十四歳

▽一月、調実編『白根嶽』成。発句一句収録。

・ 十日菊。女房に酒を乞

さすが素貞十日の菊や恨みなん

不角

前書が虚構でなければ、この頃には妻帯していたこ

とになる。

※調和門の甲州俳人調実編の俳諧撰集。

▽一二月、調和編『ひとつ星』成。発句八句、一座す

る四吟（不卜・調和・拳白・不角）歌仙一卷収録。

・ 散ル桜妻なき我を泣せけり

不角

・ 明々は卯月こよひ桜に夫かさん

不角

・ 妾なし若衆なし女房聞知レ杜宇

不角

・ 七夕後朝

八日より素顔やすらん女七夕

不角

など、恋めいた句が多く、この頃の不角の嗜好を示

している。

※調和編の俳諧撰集。破調・絵文字の頻出など過度

期の作風が見られるが、不角の発句・連句は、比較

的穏当な作。なお、引用は大阪女子大学山崎文庫蔵

本による。

貞享三年（一六八六）丙寅 二十五歳

▽一月、不卜編『丙寅之歳旦』刊。発句一句、歳旦三

日くれて、井戸の底にて啼ごとく、わずかに声有り。是を聞て、扱は此子は死ざりけりとして、遊左好卜と言ふ医を呼て、薬を用て汝は人と成たる」と、生誕の様子を聞く（『うつ蟬』）。

不角の父の家業・名については、未詳。わずかに、「予祖父は百十六歳、慈父は八十二」（『八十公』）と、年齢のみが知られる。また、「立羽」姓は、「不角の夢枕に人麻呂が現われて改姓をすすめ、橋の下一字略と示して脇に挟んでいた鶏を放つて、二三合蹴合させたことに由来する」（鈴木氏前掲論文。出典の『有磯海』に確認できなかったため、ここでは、そのまま引用させていただいた）。実際に「立羽」姓を不角が用い始めるのは元禄末年頃からで、右の逸話から推測すると旧姓は「橋」か。

延宝二年（一六七四）甲寅 十三歳

▽この年、初めて不卜にまみえ、入門。表徳を遠山から不角に改号。「牙有ル物は無レ角、難経ノ心を以号ス」

という（『続清鈔』）。

※不卜は、岡村氏。別号、一柳軒。未得門。初期江戸俳壇を代表する俳諧師。

延宝三年（一六七五）乙卯 十四歳

▽十四五歳頃、江戸踊が流行。不角も踊り・囃子に参加し、船で隅田川を上り、「浅草藤屋といふ大茶屋へあがり、踊り・独狂言・はやし、此三品の遊興済て、二ノ膳迄の料理を出す。おどりには、三味線三挺小きう小鼓一挺拍子と、此一日の費いくばく也。昏くより又船に乗て両国にて踊る」。後年、青春時代を回想して記す（『有磯海』）。

延宝六年（一六七八）戊午 十七歳

▽夏、不卜編『俳諧江戸広小路』成。入集せず。

延宝八年（一六八〇）庚申 十九歳

▽この年、不卜編『俳諧向之岡』成。現存する上・中

十三年 ○癸『四選ふうし集』(寿角編。一卷一冊)
明和元年 ○歳『亀の林』(寿角編。一卷一冊)

二年 ○歳『三笠山』(不扃編。一卷一冊) ○歳『鏡山』(寿角編。一卷一冊)

四年 ○歳『家の栄』(不扃編。一卷一冊)

七年 ○歳『初日影』(不扃編。一卷一冊)

八年 ○歳『千歳のみとり』(不莖編。一卷一冊)

安永三年 ○歳『養老の瀧』(不扃編。一卷一冊)

五年 ○歳『福の神』(不扃編。一卷一冊)

六年 ○歳『若泉』(不扃編。一卷一冊)

立羽不角年譜稿(その一)

凡例

一、本稿は、立羽不角の俳諧活動を中心とした年譜である。

一、年次を掲げ、俳諧活動の記事をまとめ、文末に典故を記した。

一、書名・刊年・人名等は、原則として『俳文学大辞典』に拠ったが、未掲載書などは適宜編者が判断し、※以下の注に根拠を記した。

一、発句は句数を、連句は一座の興行形態とその巻数を記し、連句の立句も発句数に含めた。また、同一句が複数の書に重複して載る場合もそれぞれの入集句に数えた。

一、句文の引用にあたっては、濁点・句読点を適宜補った。

一、不角の編著の所蔵と翻刻等については、主要なものにとどめた。

寛文二年(一六六二)壬寅 一歳

▽この年、誕生。姓、立羽。通称、定之助・平八。母、

三六歳(『母恩集』)。母より「汝、生れは生れたれ

ども、泣声もなく、只白瓜の如く、赤き事微塵もなし。付添ふ人々、水子はなくとも、其身の堅固成こそめでたけれと悦びの眉を開きて、赤子は日ぐれ葬るべしと、屏風の角に小袖にかいくるみて置しに、

- 元文元年 ○歳『温和集』(二卷二册) ○連『江戸菅笠』(八卷八册)
- 三年 ○歳『節小袖』(不局編。一卷一册) ○発『風姿亀鏡集』(一卷一册)
- 四年 ○歳『歳旦曙染』(二卷二册) ○歳『元文四年歳旦』(不局編。一卷二册) ○発『友音鶴』(珍角編。二卷二册)
○連『俳諧力車』(寿角編。一卷一册)
- 五年 ○歳『俳諧登り坂』(二卷二册)
- 寛保元年 ○紀『鎌倉海鏡猿田彦』(九卷九册) ○発『風姿集三集』(二卷二册) ○撰『八十公』(不局・寿角編。一卷一册)
- 二年 ○歳『帆なし集』(二卷二册)
- 三年 ○伝『或問』(智角著。写本)
- 延享元年 ○歳『春の春』(二卷二册) ○歳『俳諧音羽の瀧』(不局編。一卷一册) ○伝『不卜廿七条』(不角注)
- 二年 ○辞『統清匏』(二卷二册)
- 四年 ○歳『歳旦馬肝石』(三卷三册) ○歳『松竹梅』(不局編。一卷一册)
- 寛延元年 ○歳『歳旦初曙』(三卷三册) ○撰『米の守』(零本一册、上卷存)
- 二年 ○歳『歳旦福寿草』(三卷三册)
- 三年 ○歳『歳旦玉かつら』(一卷一册。東京都立中央図書館加賀文庫蔵本の『村雀』は同一書)
○連?『米の守後集』(零本二册。上・中卷存)
- 宝暦二年 ○歳『歳旦金銭居士』(三卷三册。綿屋文庫蔵本の『不角歳旦』は同一書) ○歳『初日影』(不局編。一卷一册)
- 三年 ○歳『鶴の声』(二卷一册) ○発『俳諧三つの枝』(不清編。一卷二册)
- 四年 ○歳『たからの玉』(不局編。一卷一册) ○歳『蓬萊山』(寿角編。一卷一册)
○撰『(うつつ蟬)』(不局・寿角編。零本一册、下卷存) ○撰『俳諧水いらす』(智角編。一卷一册)
- 五年 ○歳『歳旦寿衛広』(寿角編。一卷一册)
- 六年 ○歳『玉くしのは』(寿角編。一卷一册)
- 七年 ○歳『春物語』(寿角編。一卷一册)
- 九年 ○歳『初日の出』(寿角編。一卷一册)
- 十一年 ○歳『はつ霞』(寿角編。一卷一册)

- 四年 ○撰『籟纏輪前集』(五卷五冊) ○前『一騎討後集』(二卷二冊。零本、上卷存)
 ○撰『つげのまくら』(風雲子編。不角の匿名か。一卷一冊)
- 六年 ○撰『籟纏輪二集』(四卷四冊。零本、一・三・四之卷存)
- 正徳元年 △撰『籟纏輪三集』(零本、三之卷存)
- 二年 △発『百人一句』(平角編。二卷二冊。この年以前か)
- 三年 △撰『籟纏輪四集』(零本、三之卷存)
- 四年 ○歳『雑煮椀』(二卷一冊)
- 五年 ○撰『雲間の梅』(二卷一冊) △撰『籟纏輪五集』(零本、一之卷存)
- 享保二年 △撰『籟纏輪六集』(未発見)
- 四年 △連『正風集』(二三卷一三冊。享保二、三、四年成) △撰『籟纏輪七集』(未発見)
- 六年 △撰『籟纏輪八集』(零本、一、四之卷存) △発『百人一句後集』(二卷一冊。享保四年、一二年頃成か)
- 八年 ○撰『師恩集』(二卷一冊) △撰『籟纏輪九集』(未発見)
- 一〇年 △撰『籟纏輪十集』(未発見)
- 一一年 ○歳『不角歳旦帳』(一卷一冊。矢羽勝幸氏編『佐久の俳句史』による)
- 一二年 ○歳『(享保十二年歳旦帳)』(一卷一冊。『佐久の俳句史』は、『暁白集』と紹介。未見のため、今は香川大学付属図書館蔵本による。京都大学頼原文庫蔵本『歳旦帖』は同一書)
- △撰『籟纏輪十一集』(五卷五冊。享保二、三、一四年成) △辞『改式大成清匏』(八卷八冊。享保二、三、一四年成)
- 一四年 ○発『風姿集』(二卷二冊) ○月『ことふき車』(二卷二冊) ○撰『母恩集』(二卷一冊)
- 一五年 ○紀『木曾の麻衣』(七卷七冊) ○紀『有磯海』(二卷一冊か)
- 一六年 ○歳『(辛亥句集)』(二卷一冊。天理大学綿屋文庫は、別に『歳旦』と題する同一書を収蔵)
- 一八年 ○歳『富の門』(不肩編。一卷一冊)
- 一九年 ○歳『宝舟』(不肩編。一卷一冊)
- 二〇年 ○歳『筑波山』(二卷二冊) ○発『二面鏡』(寿角編。二卷二冊)

連『連句集。前』前句付高句集。月『月次発句高句集。紀』俳諧紀行集。辞『俳諧辞書。伝』俳諧伝書。

貞享四年 ◎浮『色の染衣』(四卷四册)

元禄二年 ◎地『江戸惣鹿子』(不角増補。七卷七册)

三年 ○前『二葉の松』(二卷二册、零本、上卷存)

四年 ◎浮『好色染下地』(五卷五册) ○前『若みどり』(二卷二册)

五年 ○前『千代見草』(二卷二册) △浮『華染分』(零本二册、一・二卷存) △怪『怪談録前集』(五卷五册)

六年 ○前『一息』(二卷二册) ○前『二息』(二卷二册) ○月『としく草』(二卷二册)

七年 ○撰『蘆分船』(四卷四册) ○前『へらず口』(二卷二册) ○前『俳諧うた、ね』(二卷二册)

○月『底なし瓢』(二卷二册) ○月『足代』(二卷二册)

八年 △前『?』(未発見) ○前『昼礫』(二卷二册) ○月『俳諧水車』(二卷二册)

○月『俳諧草結』(二卷二册、零本、上卷存)

九年 ○前『矢の根鍛冶前集』(二卷二册) ○前『矢の根鍛冶後集』(二卷二册) ○月『俳諧松蘿前集』(一卷一册)

一〇年 ○前『双子山前集』(二卷二册) △前『双子山後集』(未発見)

一一年 ◎撰『水平目』(艶士編。板元として刊行)

一四年 ○歳『福神通夜物語』(一卷一册) ○紀『紀行笠の蠅』(三卷三册)

一五年 ○歳『元禄十五年歳旦』(一卷一册) ○紀『入間川やらずの雨』(二卷二册)

一六年 ○紀『蠅袋』(備角著、ただし実質は不角著。二卷二册) ○紀『一峠』(一卷一册)

○撰『俳諧手、内栗』(紅筭編。二卷二册) ○前『俳諧広原海』(二卷二册)

宝永元年 ○前『せとりぶね』(三卷三册) ◎撰『根なしかつら』(長角編。二卷二册)

二年 ○撰『俳諧一河流』(錦角・庸角編。三卷三册) ○前『水馴棹』(四卷四册。四册目『兎手柏』)

○連『俳諧粘飯篋前集』(五卷五册)

三年 ○歳『丙戌歳旦』(一卷一册。早稲田大学図書館蔵本の外題による) ○連『俳諧粘飯篋後集』(五卷五册)

○前『一騎討』(三卷三册。零本、中・下卷存)

師」でありながら、散文を好み、多くの作品を残しているからである。不角の序・跋、紀行文などのなかには、俳論として看過することのできないものがとても多い。九十二歳の不角の生涯を、一覧するような年譜は、スペースの面でも諦めざるを得なくなってしまうた。

そこで、本稿では、年譜中から不角一族の系図と編著書だけをまず一覧にして示すことにし、年譜の本文は今後も折あるごとに書き継ぐことを目標に、第一回を書き始めることとした。浅学のいつ果てるともない、無謀な年譜の試みである。脱漏・誤謬に御教示賜らんことを、切に念願する次第である。

【図1 一族の系図】は、歳旦集巻末に一括されて

【図2 不角編著書略年表】

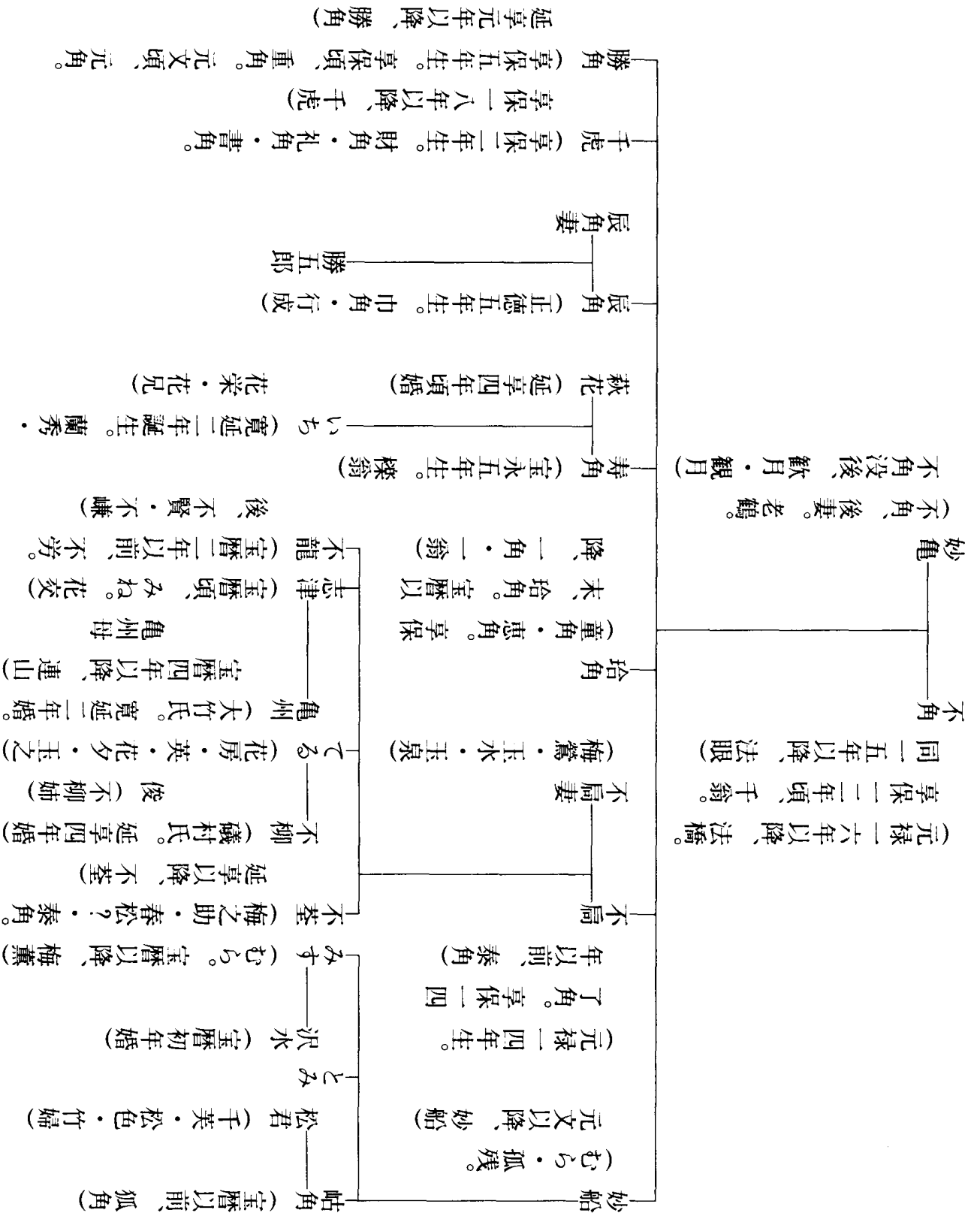
(注)略号……◎|| 刊記に年次あり。○|| 年記・内容により成立年確定。△|| 推定。

浮|| 浮世草子。怪|| 怪談集。地|| 地誌。撰|| 俳諧撰集(含む賀集・追善集)。歳|| 歳旦集。発|| 発句集。

いる一族の発句等を参考に作成したものである。不角にとって、俳諧は一族に繁栄をもたらしてくれる「生業」であり、子、孫と相伝すべき「家業」であった。事実、系図中の長男不局・三男寿角、不局の長男不莖は、不角没後も俳諧点者として活動を続けている。なお、近世の人物伝などには、すでに不角の子供に関して誤記が見られるが、不角自身は「予も七子有り。男子六人女子一人」(『八十公』)と語っている。

【図2 不角編著書略年表】不角は俳諧師の傍ら書肆を営んでおり、その編著の多くは自家版、無刊記本である。ここでは、内容等から可能な限り年次を推定して配列した(刊行年の推定理由と不角点巻類は年譜本文参照)。

【図1 一族の系図】



立羽不角年譜稿 一

安田吉人

立羽不角は、元禄期から宝暦期にかけて、江戸で活躍した俳諧師である。俳諧の大衆化に貢献した前句付点者として、また、享保俳壇の一方の雄として、近世俳諧史を語る時には欠かすことのできない人物である。

頼原退蔵氏「享保俳壇の三中心」（『頼原退蔵著作集』四。昭和55）、鈴木勝忠氏「立羽不角」（明治書院刊『俳句講座』三。昭和33）など、不角の生涯を概観し、鋭くその本質を掴み出された論文は少なくない。しかし、不角の俳諧活動が実質七十余年の長期に及ぶこと、自家版の出版物が多数あることなどから、全貌を明らかにすることは困難を極めている。しかも、鈴木氏が指摘されるように、「不角研究は、化鳥風と軽んぜら

れて宝永の『つげの枕』以後は（中略）未整理未発見の編著は多い」（『俳諧伝書集』平成6）というのが現状である。

私は『俳文学大辞典』（角川書店。平成7）編集の際、「不角」の項目の執筆を仰せつかった。以来、不角の活動を一覽できる年譜を作成したいと願ってきた。俳壇に及ぼす影響力が失せ、作風の上でも精彩を欠くと言われる晩年も含め、その生涯を一覧することが、不角の近世俳壇・文壇に残した足跡を、改めて評価する一助になるのではないかと思ったからである。しかし、実際に不角の年譜を作成し始めると、前記以外にも厄介な問題に直面してしまった。それは、不角が「俳諧